

一刻も早く原発を止めて、新しい生き方を！ 日本福音ルーテル教会としての「原発」をめぐる声明

いのちと環境をめぐる基礎的な理解

キリスト教会は、聖書の証しにしたがって、天地万物は神さまの創造によるものであることを信じ、そう告白してきました。そのことは、この世界は神さまの主権のもとにあることを意味します。大地は主のものと謳い継がれてきました。「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」（詩編24編1節）。

ですから、その被造物であるわたしたちは、この世界を神さまからの恵みの賜物として受け取り、「神を愛し、讚美し、感謝をささげ」るように期待されています。しかしながら、与えられたものをあたかも自分のものとして所有したり、恣意的に破壊したりすることは許されないのです（ルター『大教理問答書』使徒信条第一条の解説を参照）。

それだけではなく、わたしたち人間はとくに、この被造世界の管理を託されています。それを創造の目的にそうように適切に管理し、その本来の趣旨に適うように用い、発展させ、神さまが喜ばれる世界の継続的な創造に参加する務めが与えられています。それは大きな光栄であり、同時に重い責任です。

聖書には、最初の人をエデンの園に住ませ、「人がそこを耕し、守るようにされた」（創世記2章15節）と記されています。

「耕す」ことは、自然に働きかけることです。荒野を開墾し、治山治水を行い、集落を作り都市を築きます。採集によってではなく、農耕を営み、さらには工業はじめもろもろの産業を興します。人間の文明を創り上げることは、人間に安全と生活の便利さ、快適さを保証することでした。自然が征服されていくかのように思ったものでした。しかし、わたしたちは20世紀後半になって、人間が築き上げた文明なるものが、むしろいのちを脅かし、いのちが生きる環境を破壊してきていることに、遅まきながら気づいてきたのです。

わたしたちは聖書において神さまが人間に「耕す」と同時に、「守る」ことをも使命として託されていることの意味を改めて深く受け止めます。「守る」ことは、いのちとそれが生きる環境とを尊び、慈しみ、保持存続させるためのすべての営みを含みます。環境保護は言うに及びませんが、有限な資源を用いながら、しかも強いものだけが生き残ったり繁栄を謳歌したりするのではなく、すべての人類と生態系が共存しつつ、安全に安心して生きていけるような世界を作り上げていかなければならないのです。そのためには、多資源多生産多消費のライフスタイルは改めなければなりません。競争原理に貫かれた、弱肉強食の社会を作るのではなく、あのイザヤ書のメシヤが来られた暁に実現する世界のように（イザヤ11章）、弱いものも強いものもさまざまの特徴をもつものがみな平和に共存する、共生原理が貫徹した世界を実現するために労することが求められています。人間だけではなく、自然との共生も目指さなければなりません。そのような社会、そのような世界を目指すことがあの「守る」ことなのです。一部の（それが多数であっても）人びとの豊かさや便利で快適な生活を生み出すために他の人びとが犠牲にされたり、生活や自然が搾取されることはあってはならないのです。たえず社会的に弱い立場の人たちと連帯するこ

とは、隣人愛をもっとも大切な戒めとして教えられているキリスト者にとっては当然なすべきことです。

また、この正しく「耕し、守る」務めが創造主である神さまから人間に与えられていることを知らされているのは教会です。ですから、キリスト教会はその務めに率先して取り組まなければなりませんし、人間全体に課せられている務めだということを広く社会に訴える責任もあります。教会がいのちとそれが生きる環境を与えてくださった神さまに感謝し賛美を捧げることは、そのいのちと環境とを守ることに切り離すことはできないのです。

原発の大事故と今後についての見解

2011年3月11日に福島で起こった原発の大惨事をきっかけに、わたしたちは原発が人間のいのちへの途方もない脅威であり、いのちと両立しえない存在であることを深く認識しました。さらに社会的に弱い立場の人が犠牲になっていること、また後世の人々に大きな負担を負わせることは許されません。それらの人々と連帯し、神によって創造され、贖われ、生かされている現在と将来のいのちとそれが生きる場であるこの世界、地球環境とを守るために、たとえそれによって享受される快適で便利な生活と経済的繁栄を今のレベルでは維持できなくなるとしても、一刻も早く原発を廃止しなければならないと考えます。この認識に至るのが遅かったことを認めます。

脱原発を主張する以上、一方ではエネルギーの消費を低くする質素で、環境に配慮し、自然と共生するライフスタイルを身につけ、他方では社会の英知と科学技術と資本とを結集して新エネルギー、代替エネルギー、再生可能なエネルギーの開発・導入・普及をさせなければなりません。それは経済や生活の快適さ・利便性の問題ではなく、神の前で隣人とともに生きる際に必要な、正義と公平を求める倫理の問題だと信仰によって認めるからです。

日本福音ルーテル教会は神によって創造され、贖われ、生かされている現在と将来のいのちを次の世代につないでいくためにも、「一刻も早く日本にある原発が廃止されること」を第25期総会期の総会声明として社会と教会に呼びかけます。

この呼びかけを手始めとして、日本福音ルーテル教会の各教会・教区・全体教会レベルで「原発の安全性に関わる問題性」、「放射能被曝に関わる問題性」、「放射能廃棄物処理の問題性」、「核兵器廃絶との関係」、「世界のエネルギー政策とそれに関わる生活様式について」、「環境問題」等に関しての学びを含めての取り組みを開始していきます。

2012年5月4日

日本福音ルーテル教会

<付録>

3. 11. 原発事故とそれによって明らかにされた問題への倫理的観点からの見解

1. 事故によって明らかにされた原発の危険性

昨年3月11日の東日本大震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の未曾有かつ史上最悪の重大事故は、11ヶ月を経過した今もその被害は広範かつ深甚であって、原状回復というまでにはさらに何十年かかるか見通しのつかない状況にある。

原発事故の恐ろしさ

ヒロシマ・ナガサキの原爆とは比較にならない多量の放射能が一個の原発から放出された。「冷温停止状態」になったと宣言されても、原子炉内部を確認できない状態では不安が止まない。避難を強いられている周辺地区の住民の方々が元の場所で元のような生活を営むことはいったいつのことか、いや、果たしてそのような日が来るのかどうかさえ分からない。福島県内は言うに及ばず広範な地域の環境破壊と生態系の汚染、それらの人体やさまざまな生物への影響がどの程度でいつまで続くのか、安心できる状態はいつ来るのか確かなことは依然分かっていない。事故を起こした原発を廃炉にしようと言ってもそれに要する期間は長期に及ぶ。そもそも、原発の最大の問題の一つ、使用済み核燃料の放射性物質が半減期を迎えるのに何十世代という長期間を要するし、さらにその時までその有害物質をコンクリートや金属で密閉できる保証すらないし、地中あるいは海底に埋蔵することで完全に安全かどうかは分からないのが現状である。

自然の猛威の前で原発は制御不可能

地震の強さ、津波の高さが「想定外」だったと言われるが、自然はいつでも人間の予想と制御を超えるものだとして認識しておかなければならない。昨年原発事故は、自然の脅威に激しく襲われた時に、原発というものは人間の力によっては制御不可能である危険な本性が曝け出した。わたしたちは痛みとともに反省する、原発がもたらす利便性や経済性のゆえに、あるいは科学技術への過信のゆえに、原発の危険な本性に真剣には向き合ってきたという事実を。

被災者との連帯・後代への責任

わたしたちは、今回の原発事故を直接被災した多数の方々の苦しみ、悲しみの甚大さ、深刻さに思いを馳せ、被災者と連帯していきたく思う。

それと同時に、現在とこれからの世代の日本に住む人々、また広くこの世界に住む人々の安全と安心のために、この問題に真剣に向かい合っていかなければとの思いを固める者である。

2. 原発に対して抱いた大きな期待と悔い

大きな期待

太平洋戦争の敗戦間際に世界で最初の原子爆弾を二発も経験した被爆国として、核兵器

の製造、保持と使用への反対を掲げてきたわたしたちであった。しかし、こと原子力発電については、一部に確固とした信念と学問的根拠に立った反対運動はあったものの、これは忌まわしい軍事利用ではなく原子力の「平和」利用だと説明されて鵜呑みにし、また有限な化石燃料に代わる夢の新エネルギー源であると脚光を浴び、近年はCO₂の排出を抑える地球温暖化対策の切り札であり環境保全を保障するものだと喧伝されてわたしたちを含め多くの国民がそう期待した。なにより素人目には「安価」で安定した電力供給源であり経済成長と便利で快適な生活を保障するものとして、広く日本社会に受け容れられ、さらには評価されてきていたと言ってよいだろう。スリーマイル島およびチェルノブイリでの大惨事があった後もなお、あのような事故を起こさないように気をつければ、これに代わる便利なものはないと思いきや、こころで「安全神話」を信じ込んできたと言われる所以である。

関心は薄かった

わたしたちは、原子力発電の持つ根源的な問題に、今回の大事故によって遅まきながら目を開かれ、この半世紀の間の関心の持ち方また関心が薄かったことに反省の念を深く抱くものである。

3. 原発の危険性と「犠牲」を強いる構造

自然界に存在しない物質を作り出し、そこから膨大なエネルギーを引き出し、それを制御して発電に利用するこの原子力発電は、その利便性は多々あれども、その問題性もまた真剣に認識されなければならない。

被曝を強いられる作業従事者

第一には、ウラニウムの発掘に始まり発電機のメンテナンスに至るまでの発電のプロセスで、放射線被曝の恐れが幾重にもある。現実には見えないところで下請けの労働者が黙々とその危険を背負っている。そして、いざ事故が起これば、その検査・対応鎮圧・修理修復には命がけで対処しなければならない。関与した者たちの献身的な働きが称賛されるが、そもそもそのような人命に関わる危険と抱き合わせで成り立つ事業は公共の福祉と併存するのだろうか。さらに、大事故の発生によって、無辜の命と平和な生活と営々と営まれてきた産業や文化が存続の危機に晒される。長く安全安心と喧伝されてきたが、今回その危険の大きさをわたしたちは身近に嫌と言うほど知ったのである。

大地震は避けられない

しかも、ここ日本は世界に名だたる地震大国である。たとえ発電所自体が安全にできているといっても、それが乗っているのは大地震を起こすことが十分予想されているプレートの上なのである。どれほど大きな地震が起こるか、それに誘発されてどのように高い津波に襲われるかは、どれほど精緻な学問を持ってしても現状では予想し尽くすことはできない。危険性の高い土台の上に危険性の大きな発電所が立っているのである。日本と比べてはるかに強固な大陸の土台の上に建てられる原発の安全性と同日に論じることはできない。

いのである。

決して安価ではない

さらに、電力料金は火力発電と比べて安価だと言っても、ひとたび今回のような事故を起こせば、その賠償金等々を含めれば、火力発電と比べて安価などとは決して言えなくなる。経済の競争のためにということをもはや錦の御旗にしてはならない。

使用済み燃料の処理は後代に先送り

加えるに、使用済み燃料を再利用する再処理技術は確立されていないし、したがって実用化のめどは全く立っていないので、使用済み燃料の廃棄処分についての費用と安全を含めた全責任とは、現在の電力の恩恵を享受しているわたしたちは何ら負わずに、後代にあるいは過疎地に押し付けられ、当代の者たちは頬かむりしているだけである（これは現在の日本の国家財政が、年間予算の半額近くを借金で賄い、その返済をすべて後世の人々に押し付けて、現状の比較的恵まれた生活を享受していることと共通している）。これは、強者の自己本位な発想であって、誰かの犠牲を前提にはじめて成り立つ便利さである。

正義・公平・犠牲と倫理

神の前の正義と公平の実現を求めるとき、このことは倫理的にはまったく許容できないものである。しかし、繰り返すが、わたしたちの生活はそのような無責任さに目を瞑ることによって成り立っているのである。このことに気づいた以上、わたしたちは原発に体现されているこの危険で無責任な文明の構造を改める生き方をしなければならない。

端的に言えば、原発に依存する文明、生活を脱却しなければならない。原発の廃止を求めていかなければならない——そのように、これまでの反省とともに、新しい世界の在り方を胸に、この思いを固め、その実現のために努力していくことを決意する。

4. 倫理の課題として逃げずに取り組む

経済・産業の発展、高い生活水準と地球破壊の虞

わたしたちはもっとも使い勝手の良いエネルギーの一つである電力をふんだんに使うことで、日常生活を営み、産業を発達させてきた。人類のエネルギー消費量はこの一世紀半の間にロケット上昇のような急上昇カーブを描いて伸びてきた。科学技術の発展と共に産業は飛躍的に進展し、経済は驚異的に伸びた。人口も急増した。それによってわたしたちが獲得した生活水準を落とすのは容易ではない。だからといって、これほどの人類と、それが他の生きとし生ける物とともに共存しているこの地球を破壊・破滅の危険に陥れる虞のある原発の存続を容認するわけにはいかない。

代替エネルギー

「脱原発」論が唱えられるや否や必ず上げられるのは、代替エネルギーはあるのかという声と、経済と産業とようやく手に入れた便利快適な高い生活水準をどのようにして守るのかという声である。

代替エネルギーについては太陽光や風力、地熱、潮力等々の再生可能なエネルギーの開

発を文明の至上命令として、人類の英知と科学技術の粋と資本とを結集し、また全世界と知恵と経験を交流させて取り組めば、必ずや道は開けるであろう。先進国の中でも脱原発を国策として掲げている国もいくつも出てきている。日本はその後塵を拝してはならない。自然との共生を日本文化の神髄として大切にしてきた長い伝統もある。

ライフスタイルを変える試み

それと同時に、すでに多くの人々に言われ始め、またさまざまなレベルで多くの実践が試みられてきているが、ライフスタイルを基本から改め、省エネルギーに徹した文明へと変身していかなければならない。それは世界人口 100 億人の時代を間近に控え、また地球温暖化に代表される環境の保全が人類全体の至上命令になって来ている以上、生存のために不可避の課題である。

聖書の教え

わたしたちキリスト者は、聖書を通して人間は神からこの世界の管理を託されてきたことを知っているのである。神は最初の人アダムをエデンの園に連れてきて命じられたことは「そこを耕し、守る」ことであつた（創世記 2 章 15 節）。自然を搾取するのでもなく破壊するのでもなく、適切に働きかけ（「耕す」こと）、同時にその保全（「守る」こと）こそが神から与えられた使命なのである。原発問題もまさにその視点から捉えて、新しい脱原発の生き方、文明の在り方を模索し、創造していく責任を負うものである。

以上